

●資料

高機能広汎性発達障害と統合失調症における ロールシャッハ反応の特徴 —数量的分析—

The Rorschach findings with High-functioning Pervasive Developmental Disorder and
Schizophrenia Using Quantitative Analyses

明翫 光宜

(東海学院大学人間関係学部)

Mitsunori Myogan (Tokai-gakuin University)

要 旨

本研究では、高機能広汎性発達障害と統合失調症患者におけるロールシャッハ反応の数量的特徴について、包括システムを用いて検討した。研究協力者は、高機能広汎性発達障害群22名(男子18名、女子4名17.91 ± 3.70歳 range13-26)と統合失調症群27名(男子14名、女子13名21.70 ± 3.96歳 range14-29)であった。各スコアについてU検定を用いて両群を比較したところ、領域ではW・D・Dd、発達水準ではDQo・DQv、決定因では、F・m・C・SumV、特殊スコアではINC2・FAB2・ALOG、特殊指標ではPTIにおいて、有意差が認められた。今後はこれらのロールシャッハ変数を用いてHFPDDの鑑別指標を考案することが求められる。

Abstract

In this study, we have aimed to reveal quantitative tendencies of the Rorschach re-sponse of High-functioning Pervasive Developmental Disorder and Schizophrenia. Participants were 22 (18 males and 4 females 17.91 ± 3.70 years) adolescent and adult with HFPDD diagnosed by child psychiatrist, and 27 (14 males and 13 females 21.70 ± 3.96 years) schizophrenia patient. In comparison of two groups, HFPDD group had significantly higher scores on D, Dd, DQo, DQv, and F. Schizophrenia group had significantly higher scores on W, m, C, SumV, INC2, FAB2, ALOG, and PTI. It is necessary to explore scales that discriminates schizophrenia using this findings.

キーワード：高機能広汎性発達障害、統合失調症、包括システム

key words : High-functioning Pervasive Developmental Disorder, Schizophrenia, comprehension system

I. 問題

近年、自閉症の生物学的研究や精神病理学的研究、心理学的研究が活発に行われ、大きな飛躍を遂げている。自閉症研究の進歩に従い、自閉症概念も拡大してきた。それに伴い、知的障害を伴わない自閉症群である高機能広汎性発達障害 (High-Functioning Pervasive Developmental Disorder 以下 HFPDD とする)

と他の精神疾患の病態との合併、あるいは誤診が問題となった (明翫・吉橋・杉山, 2005)。HFPDD 者は、一般的に知能が高いが、独自の自我の脆弱性を抱えており、混乱や不安が生じると身体化や精神症状を示しやすい。特にいじめなど周囲からの不適切な対応を積み重ねた HFPDD 青年は、関係念慮や妄想・幻覚などの一過性の精神病状態に陥ることも稀ではない。

この状態を、発達障害の存在に気づかずに成人の疾病概念に基づいて診断を行えば、多くの誤診例が生じると考えられる。

特に注意を要するのは未診断・未治療のHFPDD青年が、統合失調症型人格障害や統合失調症と診断され、治療を受けている場合である。杉山(2002)の精神病理学的研究では、HFPDDに合併する統合失調症圏の病態は、いじめなどの迫害的体験や社会的不適応が高じてTime slip現象や、ファンタジーへの逃避といった自閉症の症状の延長上に展開していることを明らかにしている。さらに杉山(2002)は、稀にはあるがHFPDDから統合失調症に移行した可能性が否定できない症例もあると付け加えている。ここから自閉症と統合失調症は別の病態であり、基本的にはオーバーラップしないと考えられる。実際に、統合失調症として長期間にわたり治療を受けたアスペルガー症候群の成人(Lawson, 1998)も存在することを踏まえると、HFPDDと統合失調症の鑑別は重要であると筆者は考える。

そこで精神科医療における、代表的な心理検査であるロールシャッハ・テストにおいて、HFPDDの特徴に関する資料を提供することが重要である。しかし、HFPDDの特徴に関する知見はまだ少ない。実際にHFPDD者にロールシャッハ・テストを施行し解釈を行うと、統合失調症に関する研究知見やデータに頼って解釈をするために、統合失調症圏の問題を示唆する結果になりやすい。例えば、修正BRSや形態水準の数値は統合失調症を示唆する結果となり、HFPDD群と統合失調症群とが弁別できないようにみえてしまう場合などである(辻井・内田, 1999)。

今後の課題として、HFPDD者と統合失調症患者との実証的な比較研究が望まれる。実際にHFPDD者と統合失調症患者との比較は、隠

岐(1982)の研究とDykens, E., Volkmer, F., & Glick, M. (1991)の研究のみである。隠岐(1982)の研究は、自閉症群と統合失調症群は互いに母集団が異なると述べているに留めており、Dykens, E. et alの研究はExnerの統合失調症データを参考としているに留まっている点や、形態水準や特殊スコアの数値のみからHFPDD群に思考障害、または統合失調症との共通点を示唆するなど、両群の比較研究としては十分とはいえない。両群の比較にはさらなる詳細な検討が必要である。

そこで本研究では、明翫(2006)の続報として、数量的分析におけるHFPDD群と統合失調症群の比較を取り上げる。加えて、Holaday, M., Moak, J., & Shipley, M.A. (2001)のアスペルガー症候群鑑別のガイドラインの妥当性の検討も試みる。本研究によりHFPDD群と統合失調症群のロールシャッハ反応の共通点と相違点を記述することで、HFPDDおよび統合失調症の心理査定ならびに臨床心理学的援助の一助としたい。

II. 方法

(1) 対象

HFPDD群はA大学医学部精神科外来、B大学医学部小児科およびそれらの関連病院において、ICD-10(WHO)に基づいて児童精神科医が高機能広汎性発達障害と診断し、1名以上の臨床心理士が診断を確認している思春期・青年期症例(17.91 ± 3.70歳 range13-26)22名(男子18名、女子4名)である。またHFPDD群は地域発達援助システムである「NPO法人アスペ・エルデの会」の会員でもある。知能検査(WISC-III, WAIS-R)での全IQの平均値は92.91 ± 14.44(range70-120)である。

比較群として、統合失調症群は(以下S群とする)は、ICD-10に基づいて精神科医が

表1 HFPDD群とS群における主なロールシャッハ変数の平均値①

構造一覧表	HFPDD群 N = 22			S群 N = 27			U-test
	平均	SD	Me	平均	SD	Me	
R	26.41	9.25	24.0	22.22	6.42	20.0	n.s.
W	9.82	6.84	8.0	13.00	5.48	12.0	172*
D	11.68	8.36	10.0	6.37	4.32	6.0	167.5**
Dd	4.91	2.76	5.0	2.85	2.68	2.0	163.5**
S	2.14	1.83	2.0	2.22	1.83	2.0	n.s.
DQ +	3.23	3.85	2.0	4.52	3.54	4.0	n.s.
DQo	18.68	6.99	18.0	14.85	6.93	13.0	185.5*
DQv/ +	0.27	0.88	0.0	0.44	1.09	0.0	n.s.
DQv	4.32	3.06	4.0	2.41	2.00	2.0	186*
FQ+	0.05	0.21	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.
FQo	11.14	5.78	9.5	9.52	2.68	10.0	n.s.
FQu	8.14	3.76	8.0	4.67	2.27	5.0	128.5**
FQ-	7.09	3.01	7.0	7.78	4.38	7.0	n.s.
FQnone	0.00	0.00	0.0	0.07	0.38	0.0	n.s.
M	1.91	3.01	1.0	2.93	3.27	2.0	n.s.
FM	2.55	2.82	2.0	2.26	2.52	1.0	n.s.
m	0.68	1.21	0.0	1.70	1.49	2.0	180.5*
FC	1.50	1.79	1.0	0.96	0.90	1.0	n.s.
CF	1.91	2.31	1.0	1.30	1.35	1.0	n.s.
C	0.18	0.66	0.0	0.96	1.13	1.0	171**
Cn	0.00	0.00	0.0	0.11	0.32	0.0	n.s.
SumC	3.59	2.56	3.0	3.22	2.12	3.0	n.s.
WSumC	2.93	2.42	2.3	3.22	2.43	3.0	n.s.
F C'	1.23	1.31	1.0	1.00	1.88	0.0	n.s.
C' F	0.32	1.13	0.0	0.07	0.27	0.0	n.s.
C'	0.00	0.00	0.0	0.11	0.32	0.0	n.s.
SumC'	1.27	2.10	0.5	1.15	1.94	0.0	n.s.
FT	0.09	0.29	0.0	0.15	0.46	0.0	n.s.
TF	0.05	0.21	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.
T	0.00	0.00	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.
SumT	0.09	0.29	0.0	0.15	0.46	0.0	n.s.
FV	0.05	0.21	0.0	0.22	0.42	0.0	n.s.
VF	0.00	0.00	0.0	0.04	0.19	0.0	n.s.
V	0.00	0.00	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.
SumV	0.05	0.21	0.0	0.26	0.45	0.0	233.5*
FY	0.68	1.13	0.0	0.26	0.59	0.0	n.s.
YF	0.09	0.29	0.0	0.15	0.46	0.0	n.s.
Y	0.00	0.00	0.0	0.11	0.32	0.0	n.s.
SumY	0.73	1.12	0.0	0.48	0.94	0.0	n.s.
SumShad	0.91	1.11	1.0	0.89	1.31	0.0	n.s.
F	15.95	6.62	15.5	11.93	6.97	10.0	168.5*
FD	0.00	0.00	0.0	0.15	0.36	0.0	n.s.
Fr	0.00	0.00	0.0	0.15	0.46	0.0	n.s.
rF	0.05	0.21	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.
(2)	3.05	3.14	2.0	5.85	4.02	5.0	167**

表1 HFPDD群とS群における主なロールシャッハ変数の平均値②

構造一覧表	HFPDD群 N = 22			S群 N = 27			U-test
	平均	SD	Me	平均	SD	Me	
EGI	0.13	0.13	0.1	0.32	0.19	0.4	128.5**
Lambda	2.62	2.88	1.8	2.44	5.42	1.1	n.s.
EA	4.86	4.27	3.5	6.24	4.09	5.0	n.s.
Es	6.27	4.36	6.0	6.30	4.44	6.0	n.s.
D	-0.50	1.41	-0.5	-0.04	1.45	0.0	n.s.
AdjD	-0.14	1.36	0.0	0.33	1.27	0.0	n.s.
a	4.09	4.10	3.0	4.63	3.60	4.0	n.s.
p	1.50	2.39	0.5	2.11	1.89	2.0	n.s.
Ma	1.00	1.41	0.5	1.78	2.26	1.0	n.s.
Mp	0.91	2.20	0.0	1.22	1.42	1.0	n.s.
Intellect	1.09	1.95	0.0	1.33	1.98	0.0	n.s.
Zf	10.55	7.92	8.0	13.74	5.43	12.0	162.5**
Zd	-3.20	6.46	-1.0	-1.31	5.55	-1.0	n.s.
Blends	1.45	1.47	1.0	2.44	2.49	1.0	n.s.
Blends/R	0.05	0.05	0.0	0.11	0.12	0.1	n.s.
Afr	0.57	0.31	0.5	0.43	0.12	0.4	194.5*
Popular	3.23	1.93	3.0	4.04	1.85	4.0	n.s.
X + %	0.42	0.15	0.4	0.44	0.12	0.4	n.s.
XA%	0.72	0.12	0.7	0.65	0.11	0.7	n.s.
WDA%	0.75	0.15	0.8	0.70	0.12	0.7	193.5*
X - %	0.28	0.12	0.3	0.33	0.11	0.3	n.s.
Xu%	0.30	0.10	0.3	0.21	0.09	0.2	159**
S - %	0.14	0.23	0.0	0.17	0.18	0.1	n.s.
Isolate	0.12	0.09	0.1	0.15	0.12	0.1	n.s.
H	1.95	2.66	1.0	2.22	2.21	2.0	n.s.
(H)	0.64	0.95	0.0	0.89	1.09	1.0	n.s.
Hd	0.73	0.98	0.0	1.30	1.27	1.0	n.s.
(Hd)	0.77	1.15	0.0	1.33	1.11	1.0	204*
Hx	0.18	0.39	0.0	0.04	0.19	0.0	n.s.
All H	4.27	3.82	3.0	5.78	2.74	6.0	181.5*
DV1	0.64	1.36	0.0	0.56	0.80	0.0	n.s.
DV2	0.09	0.29	0.0	0.22	0.58	0.0	n.s.
INC1	0.82	1.26	0.0	0.85	0.82	1.0	n.s.
INC2	0.32	0.78	0.0	0.78	1.05	0.0	211*
DR1	1.45	2.82	0.0	0.44	0.85	0.0	n.s.
DR2	0.32	1.29	0.0	0.19	0.62	0.0	n.s.
FAB1	1.05	1.40	1.0	0.74	0.98	0.0	n.s.
FAB2	0.18	0.39	0.0	0.96	1.45	0.0	216*
ALOG	0.14	0.35	0.0	0.89	1.25	0.0	195*
CONTAM	0.00	0.00	0.0	0.04	0.19	0.0	n.s.
COP	0.18	0.50	0.0	0.59	1.22	0.0	n.s.
MOR	0.68	1.43	0.0	1.33	1.39	1.0	181.5**
PSV	1.18	1.84	0.5	0.37	0.63	0.0	n.s.
GHR	2.14	1.96	2.0	2.67	1.59	3.0	n.s.
PHR	2.91	3.42	2.0	3.96	2.95	3.0	185*

表1 HFPDD群とS群における主なロールシャッハ変数の平均値③

構造一覧表	HFPDD群 N = 22			S群 N = 27			U-test
	平均	SD	Me	平均	SD	Me	
Sum6	5.00	5.22	3.5	5.67	3.57	5.0	n.s.
Sum6Sc2	0.82	1.89	0.0	2.15	1.61	2.0	132**
WSum6	16.09	18.73	9.0	22.67	16.68	18.0	197**
S-CON	4.70	1.66	5.0	4.33	1.44	4.0	n.s.
PTI	1.32	1.64	0.5	2.22	1.55	2.0	198.5*
DEPI	3.86	0.89	4.0	3.74	1.16	4.0	n.s.
CDI	3.45	1.22	3.5	3.37	1.18	3.0	n.s.

*p < 0.05, **p < 0.01

統合失調症と診断した症例 (21.70 ± 3.96 歳 range14-29) 27名 (男性14名, 女性13名) である。

(2) 材料 ロールシャッハ標準図版1式

(3) 手続き

HFPDD群の検査の実施は、「NPO法人アスペ・エルデの会」における発達支援プログラムの基礎研究の一環として行い、研究の趣旨については本人と保護者に説明して、同意の得られたHFPDDの青年を対象とした。また、S群のロ・テストは、研究協力者から提供を受けたものである。なお実施期間は2003年8月～2005年12月にかけてである。

反応のコーディングは、筆者を含めた2名の臨床心理士が包括システムに準拠して独立して記号化した。形態水準の評定については基本的にExner (1995) の形態水準評定に準拠した。また文化差による影響を考慮して高橋・高橋・西尾 (2002) の形態水準表も参照した。なおコーディングの際に不一致が生じた反応については、筆者らが合議によって決定した。

結果の処理にあたっては包括システムに従って、反応数が14個未満の者は本研究の対象から除外している。HFPDD群では12名 (男子10名, 女子2名)、S群では12名 (男子8名, 女子4名) が除外となった (注)。また、

HFPDD群とS群のロールシャッハ変数の比較は、分散の偏りを考慮して正規分布を前提しないU検定を行った。またHFPDD群とS群のロールシャッハ反応の主な指標の度数の比較について、 χ^2 検定またはFisher直接法を行った。

III. 結果

HFPDD群とS群の主なロールシャッハ変数の平均、標準偏差、中央値を表1に示した。またHFPDD群とS群のロールシャッハ反応の主な指標の度数を表2に示した。

(1) 構造変数におけるHFPDD群とS群の比較

顕著な結果を示した項目のみを示す。領域について、WではS群が有意に高かった。一方、DとDdは、いずれもHFPDD群が有意に高かった。またDd > 2の該当者についても、HFPDD群が有意に多かった。発達水準では、DQoとDQvにおいてHFPDD群が有意に高かった。Zfでは、S群が有意に高かった。

形態水準では、WDA%, Xu%, FQuについて、いずれもHFPDD群が有意に高かった。またWDA% > .85, Xu% > .20の該当者に関して、いずれもHFPDD群が有意に多く該当した。

決定因について、形態反応ではHFPDD群が有意に高かった。運動反応ではm, 色彩反応

表2 HFPDD群とS群におけるロールシャッハ反応の主な指標の度数

ロールシャッハ変数	HFPDD群 N = 22		S群 N = 27		χ^2 -testまたは Fisher直接法
	人数	%	人数	%	
内向型	3	13.6	0	0.0	n.s.
超内向型	0	0.0	6	22.2	P=0.021*
不定型	1	4.5	10	37.0	P=0.007**
外拡型	2	9.1	0	0.0	n.s.
超外拡型	6	27.3	6	22.2	n.s.
回避型	0	0.0	0	0.0	n.s.
収縮両向型	10	45.5	5	18.5	$\chi^2=4.14^*$
XA% > .89	2	9.1	0	0.0	n.s.
XA% < .70	8	36.4	14	51.9	n.s.
WDA% > .85	4	18.2	0	0.0	P=0.035*
WDA% < .75	10	45.5	16	59.3	n.s.
X + % < .55	18	81.8	21	77.8	n.s.
Xu% > .20	17	77.3	11	40.7	$\chi^2=6.60^*$
X - % > .20	18	81.8	24	88.9	n.s.
X - % > .30	9	40.9	13	48.1	n.s.
Lambda > .99	17	77.3	16	59.3	n.s.
Dd > 2	17	77.3	10	37.0	$\chi^2=7.93^*$
DQv + DQv/ + > 2	15	68.2	12	44.4	n.s.
SumT = 0	20	90.9	24	88.9	n.s.
SumT > 1	0	0.0	1	3.7	n.s.
Populars < 4	13	59.1	12	44.4	n.s.
Populars > 7	1	4.5	1	3.7	n.s.
COP = 0	19	86.4	20	74.1	n.s.
GHR > PHR	7	31.8	4	14.8	n.s.
PureH < 2	5	22.7	10	37.0	n.s.
PureH = 0	7	31.8	7	25.9	n.s.
Mp > Ma	3	13.6	5	18.5	n.s.
PTI = 5	1	4.5	2	7.4	n.s.
PTI = 4	3	13.6	2	7.4	n.s.
PTI = 3	0	0.0	9	33.3	P=0.002**
CDI = 5	5	22.7	5	18.5	n.s.
CDI = 4	6	27.3	10	37.0	n.s.

*p < 0.05, **p < 0.01

ではCにおいて、S群が有意に高かった。濃淡反応では、SumVについてS群が有意に高かった。

体験型においても、収縮両向型に該当する者がHFPDD群に有意に多かった。一方、不定型、

超内向型の該当者がS群に有意に多かった。

反応内容について、(Hd)とAllHではいずれもHFPDD群が有意に低かった。

その他の変数について、ペア反応と自己中心性指標では、いずれもHFPDD群が有意に低か

表3 Holaday et al.のガイドラインの度数

	HFPDD群 N = 22		S群 N = 27		χ^2 -testまたは Fisher直接法
	N	%	N	%	
COP = 0	19	86.4	18	66.7	n.s.
CDI > 3	11	50.0	12	44.4	n.s.
T = 0	20	90.9	24	88.9	n.s.
M < 2	15	68.2	9	33.3	$\chi^2=5.89^*$
H < 2	14	63.6	12	44.4	n.s.
WsumC > 1.5	7	31.8	7	25.9	n.s.
EA < 4	12	54.5	6	22.2	$\chi^2=5.45^*$
合計	平均(SD) 5.00 (1.79)		平均(SD) 3.26 (1.77)		U-test 190.5*

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

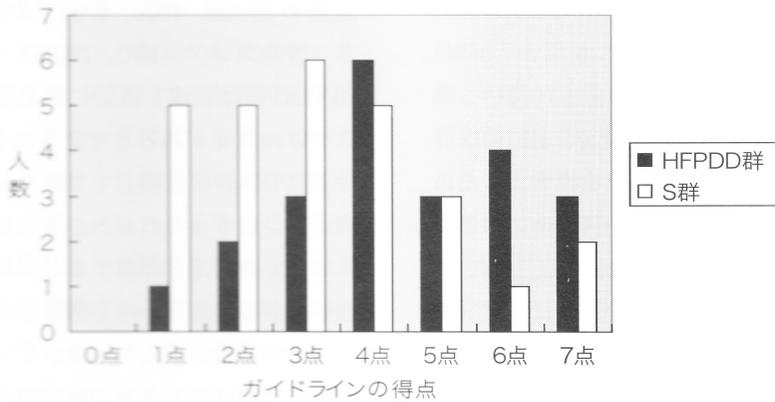


図1 HFPDD群、S群におけるHoladay et al.のガイドライン総合得点の分布

った。

特殊スコアでは、Sum6Sc2、WSum6では、いずれもS群が有意に高かった。特殊スコアの下位スコアでは、INC2、FAB2、ALOGにおいてS群が有意に高かった。またMOR、PHRにおいてもS群が有意に高かった。特殊指標について、PTIではS群が有意に高かった。またPTI = 3の該当者についてもS群が有意に多かった。

(2) Holaday et al.のガイドラインについて

Holaday et al.のガイドラインのうち「WSumC：年齢に期待される値の半分」とい

う基準があるが、明確な基準は示されていない。そこで、本研究では成人の基準データを参考にし、WSumCの平均値を3と設定し、WSumC < 1.5という基準とした。

Holaday et al.のガイドラインの各指標におけるHFPDD群、S群の度数を表3に示した。また、各指標を1点として、その得点別の度数分布を図に示した。 χ^2 検定を行った結果、M < 2、EA < 4の該当者は、いずれもHFPDD群が有意に多かった。またガイドラインの合計得点においてU検定を行ったところ、HFPDD群が有意に高かった。

表4 Holaday et al.のガイドラインの度数

	HFPDD 群 N = 22		S 群 N = 27		χ^2 -testまたは Fisher直接法
	N	%	N	%	
3点	19	86.4	17	66.7	n.s.
4点	16	72.7	11	40.7	$\chi^2=5.13^*$
5点	10	45.5	6	22.2	n.s.

*p < 0.05, **p < 0.01

表5 Holaday et al.のガイドラインの分割点におけるRangeとSelectivity

	Range	Selectivity
3点	86.4%	52.8%
4点	72.7%	59.3%
5点	45.5%	62.5%

*p < 0.05, **p < 0.01

またガイドラインの合計得点で、HFPDD 群とS 群を最も鑑別できる分割点を探索するために、以下の手続きを行った。両群の全体の中央値は4であったので、分割点を3点、4点、5点とした場合の指標の該当者を以下に示す(表4)。分割点を4点にした場合、両群の得点分布(図1)には有意差が認められた。

ここでStott (1960)の手法にならい、4点以上の該当者にHFPDD 傾向が大きいと仮定して、Range(分割点を越える該当者はHFPDD 群の何%を占めるか)とSelectivity(分割点を越える該当者のうち真のHFPDD 群は何%を占めているか)を算出すると、以下のようになる(表5)。表4と表5から、Holaday et al.のガイドラインにおける両群の分割点は4点であるといえる。

IV. 考察

(1) 構造変数からのHFPDD 群とS 群の特徴領域では、HFPDD 群はDとDdが高く、S 群はWが高かった。発達水準では、HFPDD

群はDQoとDQvが高かった。また組織化活動では、ZfにおいてS 群が高かった。これらの結果から、HFPDD 群はWのようにプロット全体を用いるのではなく、DやDdの領域を多く用いることがあげられる。しかし、情報処理の質(Zf, DQo, DQv)や形態水準の低さ、特殊スコア(INC, FAB1)を踏まえると、HFPDD 群は領域を適切に扱えないことから焦点づけの問題があると考えられる。一方、S 群はHFPDD 群に比較してプロットを統合する志向が強いと考えられる。さらに形態水準や特殊スコアとの関連を考慮すると、統合性ではなく物事の非本質的なものを排除し、本質的なものを抽出する機能が上手く働かず、周囲にあるものを結び付けてしまう過剰包摂(Arieti, 1974)という現象が反応産出過程上で起きていると考えられる。

形態水準では、有意差の示された変数はWDA%, Xu%, FQuであり、いずれもHFPDD 群が高かった。またX+%, XA%, X-%, S-%においては両群において有意差が認められなかった。両群ともに形態水準が低い点でDykens et al. (1991)の報告と一致している。しかし、HFPDD 群がFQu, Xu%, Ddの高さを踏まえると、HFPDD 群はプロットの領域を適切に扱えない点で焦点づけの問題が示唆されるが、プロットと反応を適合させようとする傾向が伺える。このように、形態水準の値において両群は共通していても、反応産出過程に

において両群に異なる点があることに注目する必要がある。

決定因では、HFPDD群は、Fの高さ、ペア反応の少なさが特徴的であった。一方S群は、m, SumV, Cなど形態が優位でない反応が多かった。これらの結果より、HFPDD群の反応は、決定因において1つの反応に2つ以上の決定因を取り入れる複合認知(辻, 1997)の段階にまで至っていないことが考えられる。これは、同時に2つの情報を上手く処理するといった、複雑な情報処理の難しさが反映されていると思われる。一方、S群は、反応産出の際に外界の刺激や運動感覚などの内的な刺激に圧倒されやすいことが伺える。高橋・北村(1981)も統合失調症者のロールシャッフ反応の特徴の1つとして「純粹色彩反応(C)とする色彩型」を詳しく述べている。高橋・北村によると、インクプロットの色彩認知は、色彩を用いようと意図しなくても、おのずからなされるものであるから、感情が平板化したり、鈍麻しがちな統合失調症者は色彩を受動的に反応するために色彩型の体験を生じやすいという。また色彩の受動性という観点からは、Shapiro(1960)は、「慢性統合失調症者が示すCやCnに関しては、色彩反応の心理学的意味を感情面に結び付けて理解することが難しい」と述べ、「CやCnは論理的な機能や適切な図版との距離を保つことができないほど色彩に支配されている状態である」と指摘している。これらの現象は、統合失調症患者が、心の自由度が非常に低く、内界や外界に発生する刺激になすことなく振り回されている状態(中井, 1998)とはほぼ一致する。このように両群の体験様式の違いがプロット体験に反映されているように思われる。

反応内容では、S群に比較してHFPDD群に(Hd), AllHが少なかった。一方、S群においてMOR, PHRの値が高かった。HFPDD群は

プロットを1つの物としてとらえやすいため、反応内容も単純な構造を持つ反応内容が出現しやすく、人間反応のような分化した反応は出現しにくかったと考えられる。一方、S群は人間反応が産出されるが、反応産出の際に不問にすることが必要な不一致部分を意味づけてしまうために、MOR, PHRが多く該当したと考えられる。

特殊スコアでは、S群がHFPDD群に比較して、Sum6Sc2, WSum6の値が高く、また下位スコアではS群にINC2, FAB2, ALOGが高かった。さらに特殊指標ではS群のPTIの値が高かった。詳しくは明翫・辻井(2007)にて検討したが、不適切な結合について、Rapaport(1946)の距離の概念を用いてHFPDD群とS群との質的な違いを検討すると、HFPDD群の不適切な結合は、距離の喪失による統合の失敗である。一方、S群の不適切な結合は、距離の喪失による統合の失敗に加えて、さらに反応形成の過程でプロットから離れて病理的な作話が展開する(距離の増大)。これはRapaportの逸脱言語表現では作話的結合反応と作話反応の違いとなる。包括システムでは、これら区別は非現実性の程度(Level1, Level2)により判断するが、プロットからの距離の逸脱という観点も加えて検討することが両群の鑑別に有効だと思われる。また質疑段階で、ALOGがS群に多く出現し、HFPDD群に出現しない点も重要である。特殊スコアでは、INC2, FAB2, ALOGが両者の鑑別の注目点となるであろう。

(2) Holaday, et. al. のガイドラインについて

HFPDD群とS群と比較するとHFPDD群が有意に高い結果となった。さらに表4, 表5からガイドラインの総得点において分割点が4点にすると、弁別力が最も高くなることが示された。

しかし、各指標を検討すると出現頻度に有意

差が認められた指標は $M < 2$, $EA < 4$ のみであり, さらに表5から HFPDD 群と S 群を弁別するには十分でないことも明らかとなった。統合失調症との弁別力をより高めるためには, 本研究で述べてきた両群のプロット体験の違いをサインに反映させる必要がある。

(注) HFPDD 群, S 群ともに反応数が 14 未満の者が多かった要因について, 以下の2点が考えられる。

両群の反応数が 14 個未満のプロトコルをみると, 「インクのみ」といった叙述反応 (card description, color description) が多いことが見出された。ここから, 筆者はこれらのプロトコルには被検者の萎縮した態度が反映されており, それが反応数の少なさにつながったと考えた。

また反応数が 13 未満の場合は, 再度検査の目的や方法について説明して動機付けることで, 14 個以上の反応を生成することが多くなることが期待できる。しかし, 本研究では再施行を行った事例もあるが, 大半の事例はクライアントの疲労等を考慮して再施行を行わなかった。

付 記

本論文は, 「NPO 法人アスペ・エルデの会」における発達支援プログラムの基礎研究の一部であり, 筆者の担当分をまとめたものである。本研究を進めるにあたり, 多大なるお力添えとご指導をいただいている中京大学心理学部八尋華那雄先生, 中京大学現代社会学部辻井正次先生, 東亜大学人間科学部内田裕之先生, あいち小児保健医療総合センター杉山登志郎先生に厚く御礼申し上げます。

また統合失調症患者のロールシャッハ・プロトコルの提供をいただきました浜北病院鈴木順一先生, 守山荘病院小野和海先生, 岐阜南病院伊藤紗智子先生に厚く御礼申し上げます。また研究協力をいただきました浜松医科大学付属病院の高井義文先生に厚く御礼申し上げます。

最後に本研究にご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

文 献

- Arieti, S. (1974) : Interpretation of schizo-phrenia. Second edition. Basic Books [殿村忠彦・笠原嘉監訳 (1995) : 精神分裂病の解釈 I, II. みすず書房].
- Dykens, E., Volkmer, F., Glick, M. (1991) : Thought Disorders in high-Functioning autistic adults. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 21 (3), pp.291-301.
- Exner, J.E. (1995) : Rorschach Form Quality Pocket Guide. Rorschach Workshops. 中村紀子・店網永美子・丸山香 訳 (2002) : ロールシャッハ形態水準ポケットガイド (改訂版第3刷) エクスナー・ジャパン・アソシエイツ.
- Holaday, M., Moak, J., Shipley, M.A. (2001) : Rorschach protocols From Children and Adolescents With Asperger's Disorder. *Journal of Personality Assessment*, 76 (3), pp.482-495.
- Lauson, W. (1998) : Life behind glass. Southern Cross University press (ニキリンコ訳 2001 私の障害, 私の個性. 花風社).
- 明翫光宜 (2006) : 高機能広汎性発達障害のロールシャッハ反応—数量的分析. 包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌. 10 (1), pp.31-44.
- 明翫光宜・辻井正次 (2007) : 高機能広汎性発達障害と統合失調症におけるロールシャッハ反応の特徴—反応様式の質的検討. *ロールシャッハ法研究*, 11, pp.1-12.
- 明翫光宜・吉橋由香・杉山登志郎 (2005) : 自閉症研究の現状と展望. *脳と精神の科学*, 16 (1), pp.5-16.
- 中井久夫 (1998) : 最終講義—分裂病私見. みすず書房.
- 隠岐忠彦 (1982) : 自閉症の人間発達学. 誠信書房.
- Rapaport, D. (1946) : Diagnostic Psychological testing II. *The Year Book*.

- Shapiro, D (1960) : A perceptual understanding of color response. In Rickers-Ovsiankina. (ed) Rorschach Psychology. pp.154-201. [田澤安弘訳 (2005) : ロールシャッハ色彩論. 大学教育出版. pp.1-65.]
- Stott, D.H. (1960) : The prediction of delinquency from non-delinquency behavior. British Journal of Delinquency, 10 (3) , pp.195-210.
- 杉山登志郎 (2002) : 高機能広汎性発達障害における統合失調症様状態の病理.小児の精神と神経, 42 (3) , pp.201-210.
- 高橋雅春・北村依子 (1981) : ロールシャッハ診断法Ⅱ. サイエンス社.
- 高橋雅春・高橋依子・西尾博行 (2002) : ロールシャッハ形態水準表—包括システムのわが国への適用. 金剛出版.
- 辻 悟 (1997) : ロールシャッハ検査法.金子書房.
- 辻井正次・内田裕之 (1999) : 高機能広汎性発達障害のロールシャッハ反応 (1) —量的分析を中心に. ロールシャッハ法研究, (3) , pp.12-23..

*

*

*